

ITABASHI ART CAMP 2017



TOKYO KASEI UNIVERSITY



# アートキャンプ2017によむせて。

「板橋アートキャンプ2017」は、東京家政大学板橋キャンパスを舞台に、2017年6月10日・11日の二日間で開催されました。

本学造形表現学科学生を中心に、各々がやりたいことを提案しました。人が集まりチームが生まれ、次第に多くのプログラム・企画運営が動き出しました。アートキャンプとは、そんなアートの実現を目指し楽しみながら動き続ける手作りのアートプロジェクトです。人との響き合いあり、関係性が内包されたアートが実現する。そしてもちろん、その全ての過程を楽しみ経験として心に刻むのです。

今年のテーマは「わ」です。平仮名とすることで、様々な「わ」が生まれ表現されていくことを求めて統一テーマとしたということです。アートプロジェクトは、関わる人同士の関係性が重要視されるものですが、このことも含め各プログラム共通の言葉とし設定しました。

この自由度の高いけれど、ある繋がりや埋め込まれたテーマによって様々な「わ」が表現され、多くの人の参加が実現できました。今年も造形表現学科だけでなく、児童教育学科や環境教育学科からの参加があり、広がりのある内容となりました。また、ヒューマンライフ支援センターの「森のサロン」の参加で、家政の森に、こどもたちの笑顔と声が響きました。

アートキャンプは今年で6回目となり、内容の変化も見え出しました。定番となっているようなプログラムにも、いままでとは違う切り口での展開がありました。







## CONTENTS

- 02 はじめに
- 03 ライブペイント
- 05 陶芸
- 07 染色
- 09 金工
- 11 白くま
- 13 石膏
- 15 映像
- 17 Space Design
- 19 結城ゼミ
- 20 環境
- 21 住環境
- 22 森のサロン
- 23 炊出し
- 24 ステージ
- 25 記録・広報
- 26 写真コンテスト
- 27 データ
- 28 本部
- 29 スケジュール
- 30 おわりに

今年度も夏の開催でなく、6月期に行うことで、附属中高生や他学科など多くの見学者に恵まれ、盛況のうちに幕が閉じました。大事なことは終わった後にも待っています。何を感じたかを振り返り、次に活かすことを発想する、そんな気持ちを持つことが大切です。成功したことも思うようにいかなかったことも、全てが価値ある経験です。このアートキャンプを通し、学生一人一人が自分にとって大切な「わ」に気づき、造形表現することで人と成長しながら、毎日がより豊かなものになることを願っています。またこの冊子も、二日間のために積み重ねた思いや、もちろん多くの苦労も下敷きにして作り上げたドキュメントです。冊子のディレクションや、デザイン自体まですべて学生の手により制作されました。参加した人もそうでない人も、じっくりとご覧ください。

造形表現学科 学科長 兼古昭彦







# #01 ライブペイント

## 自由なアート。楽しむアート。

私たちライブペイントでは1mほどの金属のイーゼル36台を所定の位置に並べある視点から覗くと一つの「わっか」が浮き出るという作品を制作しました。イーゼルにはそれぞれ透明の塩化ビニールシートを張り、キャンバスに見立ててアクリル絵の具で色を塗りました。「わっか」の部分は透明のまま残し、それ以外の部分に自分たちで好きな色を付けていきました。

準備段階では実際にビニールハウスで使っている透明な塩化ビニールシートを張ってキャンバスを制作したり、夜になるのを待ち、みんなでイーゼンを並べプロジェクトにて円の画像を投影しアウトラインを描きました。いろんな先生方にアドバイスをいただきながらメンバーみんなで試行錯誤をしました。

最終的にゲスト参加型のプログラムだったためお声がけをしたところ様々なお客さんやクラスメイト、先生や助手さん方が楽しんで参加してペイントしてくださいました。

見所は完成した超大作です。2日間をかけてみんなのキャンバスとサークルさん達のコラボ、山藤先生やお客さん達のすてきなキャンバス



が出来上がりました。並んだ風景は  
とても圧巻でした。ご協力いただい  
た皆さんに感謝しております。あり  
がとうございました。

造形表現学科 三年 滝沢悠佳



本年度から着任して様々な状況を  
把握できていないままでしたが、アー  
トキャンプを観させて頂きました。  
日頃からみなさんが造形表現を行っ  
ている中で、どのようなことに興味  
があり、どのようなことを表現した  
いと思っているのかを知ることがで  
きるよい機会だと考えながら、みな  
さんの創り出すものを観ていました。  
また、グループでの制作過程をどの  
ように取り組んでゆくのかも関心を  
持って観させて頂きました。結果と  
して、大学の中庭がみなさんの作品  
で満たされ充実している状態は、と  
ても魅力的な風景になったと思いま  
す。また、この場に訪れていたお客  
さんの表情からもアートキャンプの

楽しさが伝わってきました。私は造  
形表現学科らしさとは何かというこ  
とを着任してから考えていましたの  
で、アートキャンプを観て造形表現  
学科らしさの一端を発見したような  
思いました。アートキャンプは積極  
的な広報はなかったと思いますが、  
勿体ないとも思いました。これから  
も大学内だけでなく、大学外でもみ  
なさんの力と魅力を発揮して欲しい  
と思いますし、その風景を見たいと  
思っています。次回は是非、みなさ  
ん自身が企画したプロジェクトを展  
開して欲しいと思います。期待して  
います。

造形表現学科 准教授 山藤仁



#### STAFF

教員 山藤仁  
助手 小野寺光 舛井彩子  
3年 滝沢悠佳 (代表)  
山本夏己 森本祐加  
中野寛菜 西川沙里  
望月春子 高橋依純  
丸山紗英 前田梨帆  
東太田鈴菜 府川園実  
山中萌乃  
2年 大井つぐみ 木村茜  
新井美稀





## #02 陶芸

# 一人のピースを当てはめ続けて。

私たち陶芸グループは、今年のアートキャンプのテーマである「わ」を意識して高さが約150センチメートルある「はに『わ』」と、埴輪の馬を制作しました。

制作時間は、アートキャンプが始まる約1〜2ヶ月まえからはじめ、授業がなく空いている時間やお昼、放課後を利用して少しずつメンバーと先生、助手さんの力を借りて、制作していきました。埴輪と馬は、白土粘度をひも上にのべし、その紐をだんだんと上に積み上げていき、中が空洞になるようにしました。埴輪と馬の全体ができたら馬は胴体を半分にして釜で焼き、釉薬などをいっさいかけず素焼きの土の感触を残したままの状態、埴輪はいくつかの部品にするためにいったんバラバラにして釜で素焼きにしました。これは、当日アートキャンプにきてくださったお客様に釉薬を塗っていただき、その部品を組み合わせることでカラフルな埴輪を完成させるためでした。アートキャンプ当日、多くのお客様が陶芸グループに足を運んでくださって何も色がついていなかった埴輪の部品に色がついていきました。部品に色がすべてついたら、一つ一つの部品を組み合わせるとてもカラ



フルな巨大埴輪を完成させることができず、最初は、こんなに大きな埴輪と馬を制作するのはとても大変で難しいと思われていましたが、制作するときいろいろと助けてくださった先生方や助手さん方、部品に色を塗ってくださったお客様のおかげで無事完成させることができました。本当に感謝しております。埴輪と馬は学内に設置してありますので見ていただけるとうれしいです。

造形表現学科 三年 濱野美月

アートキャンプの果たす役割って何だろうか？

参加者が「楽しむ」「楽しませる」とが大前提としてあるとすれば、ワークショップの意味を考えなければならぬ。なぜみんなで創るのか？ 沢山の人が集まれば、当然意見の不一致が生まれ、不協和音が起きるだろう。

時として妥協しなければならなくなる。投げ出したくなることもしばしばだ。ならば一人でやったほうが楽に決まっている。他人を気にせずに思いっきりできるのだから。

僕はワークショップの専門家ではない。一人でコツコツとものを作っているタチだ。だからワークショップを学問として見たことはないし、あまり見たくないのかもしれない。た

だ何回かこのアートキャンプや他のワークショップに参加させてもらっているが、そこには不確かだけれど「みんなで創るアート」がある瞬間、想像以上にアートの効果が起こった時、つまり自分たちの能力を超えてしまい、目的以上のものやことが起こった時、初めてその真髄を垣間見、その重要性を感じるのではないだろうか？

僕の場合は陶芸なので、今回も楽焼きを行った。メンバーは3年生5人、1年生1人と例年になく少なかったが、全員で力を合わせて埴輪の大作を2点も作り上げた。2日目、全てが焼き上がり組み立てた瞬間、疲れも吹き飛び達成感に包まれ、想像以上の出来栄えに心が震えた。その作品は今、憩いの広場に展示している。

造形表現学科 教授 高田三平



STAFF

教員 高田三平  
 助手 榎本茜  
 3年 濱野美月 (代表)  
 吉岡美緒 吉野紗雪  
 藤井優美 松崎朱夏  
 1年 岸本彩加





## #03 染色

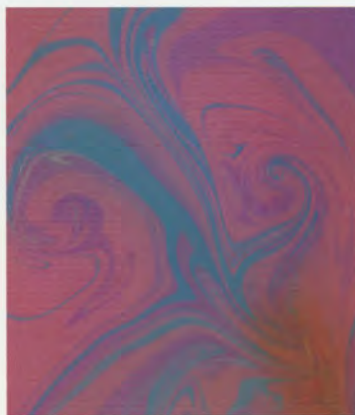
# 自分の色を身につける。

今年の染色はマール染めのワークショップを行いました。マール染めは染料を水面に垂らし、なでるように割り箸や櫛などで模様を描きます。はがき、紙袋、くるみボタン、リボンの中から選んで染めていただきました。はがきは小さいお子さんでも染めやすく、紙袋は茶色と白の2色を用意しました。茶色はシックでかっこ良く、白はマールの色が映えていました。くるみボタンは品切れになるほどとても人気があり、大きいボタン一つ、小さいボタン2つの合計3個で1セットでした。くるみボタンを使って早速髪ゴムにしてくれていた方も見かけました。リボンも合計3本で1セットで、そのうち1本リースでした。リボンも人気があり、身につけてくれる方もよく見かけました。私たち染色メンバーも当日はマール染めのリボンを身につけました。展示では、ワークショップに参加してくださった方に染めてもらったマール染めの和紙を屏風に貼り、夜はライトアップをしました。また、フラダンスサークルさんとのコラボ企画で本部さんと協力し、マール染めで染めた髪飾りを作り、当日のステージでフラダンスサークルの方に付けて踊って



いただきました。今年の染色もお子さんから大人の方まで沢山の方が参加してくださり、盛り上がりました。

造形表現学科 三年 小久保結



アートキャンプ2017の染色

プログラムは、マール染を企画しました。1月中旬に始めた時の参加者は4名程でしたが、その後、話し合いを重ねていくうちに14名のスタッフになりました。3年生と1年生で構成されたプロジェクトチームで、昨年楽しかったので今年も参加を決めたという学生もいました。3月末からは、全員で染色手順を確認し、どのようにすれば多くの方に楽しんでもらえるのか、アイデアを出し合って様々な素材を試してみました。実際に染めてみると全く染まらないものや染めムラになるものもありました。また、乾燥に思った以上に時間を要することもわかり、適した素材を選ぶ難しさを実感したのではないでしょうか。試作を繰り返し

てさまざまな問題を皆で解決しながらそれぞれの役割を認識した結果、当日は円滑に進めることができました。

今回はフラダンスサークル「Dua

「Dua」とのコラボレーション企画で髪飾りを40個準備することとなり、間際までフル回転でした。マール染めの布を花びらにしてコーサージュ風に仕立て、無事に完成！当日のステージではフラの調べに合わせて、ダンスとともにやさしく揺れていました。スタッフの苦労が実った素敵な空間に映りました。

造形表現学科 准教授 早瀬郁恵



#### STAFF

教員 早瀬郁恵 助手 澤村智奈美  
上野はるか  
3年 小久保結（代表） 和田紗英  
油井瑠里乃 斎藤萌香  
塩谷里緒 榊真里奈 須藤秋穂  
加藤百華 山下のぞみ  
完本知穂 大嶋瞳 栗原舞弓  
1年 中野芹菜 高橋美保





## #04 金工

# 熱く叩く鉄、強く溶接する「わ」。

金工では、全員で金属を加熱し、ハンマーでたたき作り上げていく、鍛造を行った。プログラム内容を決めた後の、オブジェ制作からアートキャンプ最終日までには本当にあつという間の出来事であった。当日に開催したワークショップは、小さな子供も参加しており危険かもしれないと開催自体を迷っていたが、両日とも安全に楽しく体験してもらえたように嬉しく思う。熱い鉄に向かう来場者やその子供達の目も、熱く輝いていた。出来上がったこのオブジェは、たくさんの方が作ったパーツを繋げてできたタワーなので、「つながったタワー」と名前をつけた。鉄をたたいている時の人の感情はわからないが、みんな最後には幸せそうな笑顔をいっぱい浮かべていた。その人たちとメンバーが作った結晶「つながったタワー」をくぐればきっとみんな幸せになれる、かもしれない。学生メンバーは金工初参加の3年と、昨年経験済みを含む2年生。はじめはお互いに遠慮していた。だが、鉄をたたき、ひねり、溶接していくうちに、お互いに打ち解けていき、強く結束していくことができた。最後に「共同制作ができてよかった」「授業でできない体験ができた」「本当に



楽しかった」などの声が聞けて代表としてとても嬉しく思う。忘れられない楽しいアートキャンプにできたこと、たくさんの人たちの協力によりつながりタワーを完成できたことに感謝しています。ありがとうございました。

造形表現学科 三年 小林ひかる



ものすごい上から目線だが、今の学生には、熱くなる体験が足りないのではないかと。将来の人生では、仕事

がうまくいかなかったり、落ち込んだりするものも多いだろう。そんな時に、自分のこれまでにあった熱くなる体験を振り返ることは少なくない。今年のアートキャンプの反省会でも、参加学生は「楽しかった」「大変だったけれどやってよかった」と言ってくれた。しかし、学生にとって熱くなる体験だったかはまだ確信が持てないだろう。もちろん熱くなる体験は決して成功体験や達成感の

ある結果ばかりとは限らない。私にとっての熱くなる体験は、学生時代の失敗だらけの金属との出会いだ。当時の私も本学の学生も、その入り口を見せられたという出来事としてはそう大差ない。だが、私はやはり熱くなる体験があったと確信している。いや、そう思い込んでいる。そして熱くなる体験は、いま自分が生きることの支えになっている。今年

の学生たちも準備に長い時間をかけ、火花や火傷に苦しみながら文字通り熱い経験を経てアートキャンプを立派にやり遂げた。まだ確信が持てなくてもいい、単に思い込みでもいい、もしこの出来事を忘れられない熱くなる体験にできたならば、これからの人生は、少しだけ生き易くなれるかもしれない…

造形表現学科 教授 押元信幸



#### STAFF

教員 押元信幸  
 助手 上武瑞歩 神宮寺未希  
 3年 小林ひかる (代表)  
 今村千秋 門井紗貴子  
 大河原はる香 関根梓  
 2年 西村萌 野村ひなの  
 横橋滯 石井沙樹  
 金親七海 渡辺茜





## #05 白くま

# 手元のひととき、見下ろす風景。

私たちしろくまの活動内容は、憩いの広場の近くにツリーハウスを設置し、その下でのかき氷の提供です。今回空間を提供するにあたって、誰もが一度は憧れたことがあるだろう、ツリーハウスに決まりました。家政大学は自然が多い所です。自然に囲まれた場所で、いつもとは違う視点から見える景色を楽しんで欲しいという狙いがあります。ツリーハウスを設置する場所は、当日のメインステージがよく見下ろせる位置にあるので、地上からよりもステージ全体を良く見渡せます。なので、より一層ステージのパフォーマンスを楽しむことが出来ると思います。ツリーハウスを製作するにあたって、床に座ってくつろぐ際に足を外に出してブラブラさせたいというこだわりがありました。そこで足を通せるようにツリーハウスの周りを柵で囲みました。是非足をブラブラさせながら、思いっきりくつろいではいかがでしょうか。また登る時にはしろくまスタッフ手作りの、しろくまのお面を被って登るとより楽しめること間違いなしです！

2日間を通して、沢山のアートキャンプスタッフや外部の方にかき氷を食べてもらうことが出来、そしてツ



リーハウスも沢山の人が登ってもら  
うことが出来ました。このツリーハ  
ウスは常設されます。これからもずつ  
と残っていく作品を作れたことは、  
とても良い思い出になりました。

造形表現学科 三年 本田幸



今年の「しろくま」は、「ツリーハ  
ウスをつくりたい」との声から始まっ  
た。3月から構想を練り、場所探し、  
模型でのスタディ、現場での実際の  
大きさを感じての検討など、計画を  
しっかりと行なった。近所の中澤木  
材にも材料を見に行き決めることも  
できた。

計画をきちんとすればする程、大  
変さも見え、残念ながら規模を縮小  
することになった。しかし、これは  
リアルに作品をつくる醍醐味でもあ  
る。主要メンバーを中心に、みんな  
時間を合わせるのが大変な中、計画  
段階から含め、延べ25日間の制作作  
業となった。皆よく頑張った。そし

て、作業が進む中、もちろん伝統の  
かき氷も忘れず、また、しろくまの  
お面やTシャツも制作、お面を被っ  
てツリーハウスを「しろくまのおう  
ち」とした。当日は、最初からサポー  
トしてくれていた加藤学先生が、や  
はり木工をやらねばということで、  
ツリーハウスの足元で工削所を開設。  
来る人たちに木工も提供した。

昨年の経験者である3年生がうま  
くりードしてくれ、とても大変な企  
画をやり遂げたなという思いがある。  
来年度は如何に発展するか楽しみで  
ある。

造形表現学科 教授 手嶋尚人



#### STAFF

教員 手嶋尚人 助手 深山利実  
三年 本田幸(代表) 宮田結衣 百瀬風花  
二年 丸山千陽 加藤唯 本橋京香 松澤琴  
武縄千裕 吉川菜里







# #06 石膏

## 石膏の性質をあやつって。

石膏ワークショップ代表の寒河江です。今回アートキャンプ初参加の石膏ワークショップでは、水風船に石膏を流し込んで作るオブジェやアロマストーン作りを行いました。さて、では何故に石膏でワークショップなのか？それは石膏がとても面白い素材だからです。石膏の面白いところはなんと「水に混ぜると固まる」ということです、しかも水に混ぜると化学反応によって発熱します。(50〜70度くらいになります。)

石膏はこんなに不思議で面白い素材なのにあまり親しまれていません。(石膏と聞いて何をするのか疑問に感じている人が多かったと思います。)骨折したときのギブスや建築材料として意外にも身近に使われている石膏、家政大学では彫塑や陶芸、金工等で型取りをする際に使われていますが、もっと手軽に楽しんでもらいたいと思い今回のワークショップを企画しました。準備期間中はどうしたら参加者にとって楽しいワークショップになるかグループ内で話し合い、作業工程や素材の研究を重ねていきました。当日は他学年の生徒や森のサロンの子供たちに参加していただき、沢山の人が石膏という素



材を知ってもらえたと感じています。初参加ということで大変なことが多かったですが、楽しいことのほうが多かったです。ありがとうございます。

造形表現学科 三年 寒河江絹代



石膏プログラムは、宣伝ポスターの石膏像マルスの冷たく、無慈悲な闘いの神の印象とは打って変わった、かわいらしい印象の内容であった。水風船を使用し作る恐竜のたまご、シリコン型にアロマオイルを含んだ石膏を固めたアロマストーン。白い石膏に色水を加えるとかわいらしいバステルカラーになる。(学生間では石膏プログラムリーダーの指をかたどったシリコン型が密かな人気だったよう)準備段階でも、様々な容器を使用し、「より作りやすさ、手に取りやすさ」を探索していた。

普段の学校生活では、課題にひた

むきに向かう印象の学生が多い。アートキャンプで、アートのコミュニケーションをすることで科学反応が起きる。スタッフとして参加した学生もきてくれた後輩やお子さんから学ぶもの得られるものが非常に大きかったと思う。

当日、楽しそうに運営している学生を目にすることができた。親子連れの体験者が多く、保護者の方も素材についてやづくり方について熱心に質問をしていた。懸命に説明している学生の姿が私にとっても嬉しかった。時に、お客さんがいっぱいになって順番待ちの列ができたのも、彼女たちの魅力が伝わったからだと思う。これからの活躍に期待。

造形表現学科 助手 深山利実



#### STAFF

助手 深山利実

3年 寒河江絹代(代表) 重原茉奈 新坂瑞希 佐藤恵

小島光夏 佐々木七瀬 砂小田佳珠 河内花織





# 日本ジグザグ

#07

映像

## 全員が、魅入った。

アートキャンプのテーマ「わ」を元に、映像では「和」「日本」「ファッション」を取り入れた映像を制作した。自分たちの足元を撮りながら学校を出て原宿に行き、学校に戻ってくるという流れを「わ」としてイメージしている。そして、原宿ではたくさんの方々に「輪」と「和」をモチーフにしたリースを持ってスナップ写真を撮らせてもらい、制作にご協力していただいた。編集では、スナップ写真を並び替え、ズームインとズームアウトを繰り返して、「わ」の繋がりにこだわった。その他に、粘土でのキャラクター制作や「和」「日本」の素材制作にも力を入れた。キャラクターは、スナップ写真のモデルさんたちを参考にし、本人よりも先に出てくるので、本人登場!のようなお楽しみな部分も取り入れてある。

当日は映像の他に、映像に出てくるモデルさんたちのように写真を撮ってもらったために、リースを設置した。皆、興味を持ってリースを片手に写真を撮っていて、たくさんの「わ」がそこで生まれている感じがした。



メンバーが2人のみで、制作を上手く進められるか不安だったが、当日までに映像を完全させ、たくさんの方々に見て頂けたことはとても貴重な体験になった。2日目には一般のお客様に2人で表現した「わ」がちゃんと伝わっていくというお言葉をいただき、その時に達成感を感じることができた。

造形表現学科 二年 佐藤かおり

これまでのアートキャンプにおける映像によるプログラムは、作り手がまず主軸にあり、次に参加する側の役割があつて、かつその双方が学内にあり、コンテンツは内で完結することが前提のものだった。しかし、今回の映像プログラムは、企画者二人が外（街）へ出て、それぞれのひととの繋がりを軸に、ファッションスタイルを手繰り寄せながら、今の日本の一面を映した。この制作の立ち位置自体に、今後考えるべき点が多くあり、二人には感謝したい。

何らかの表現手段によって社会を切り取り、人々に問いかけ、新たな解釈を求めつつ提案し、社会を活性化する。これは現代のアートの役割としてスタンダードなものであるが、今回の映像プログラムのもつドキュメンタリーとしての性質は、読み替えに対しての客観性と、視線の先にあるものへの介入の距離感を保つ。この点が、映し出された人々と、企画した二人との関係性を表していて、多くの参加型映像作品に見られる「素材としての人々」とは違う、大切なところだろう。

当日、映像の中で使われていた「輪」が上映会場に置かれていた。映像を観、それを手に取った瞬間、内と外はつながり、作品が結実したと感じた。

造形表現学科 教授 兼古昭彦



#### STAFF

教員 兼古昭彦  
2年 佐藤かおり（代表） 坂本菜緒





## #08 Space Design

# あまいひととき。おいしいとき。

スペースデザインサークルでは、22号棟横のデッキにカフェスペースを作り、ピザ窯を使った食べ物と飲み物を提供しました。

カフェのテーマはパステルで、全体的に淡く優しい雰囲気だまどめ、お店の名前を「癒しの空間」という意味を込めて「recomfort」としました。

準備では主に、テーマに合うような装飾や看板づくりと、デッキに取り付ける壁づくりをしました。壁を設けることで特別空間を作り出し、よりパステルの空間が楽しめるようにしました。

当日提供のピザは、ピザ窯を使用して作ったことで、普段食べることのできない、アートキャンプならではの提供物となったのではないかと思います。

たくさんのお客さんが来てくださり、ピザも無事おいしく焼くことができ、喜んでもらうことができましたのではないかと思います。アートキャンプを楽しみつつも、ちょっと休める癒しの空間が提供できていたらいいなと思います。来てくださった方、協力してくださった先生方、ありがとうございました。



アートキャンプの中では珍しいサークルとしての参加である。今年で3回目となり、アートキャンプの「癒しの空間」「憩いの空間」として定着できたと思う。

今年のテーマは「パステル」でその言葉から生まれるイメージをどう空間で伝えるかが課題となった。今回、初の試みとしては、空間の骨格・構成をつくるグループと空間を演出するグループ、カフェでもてなしを考えるグループと役割分担したことだ。これは忙しく全員で集まることの難しさ、そして、興味のズレからくるモチベーションの違いなどを考慮した策である。もちろん、欲張りな学生は複数に跨がって活動をした者もいた。多勢での作業、意志の疎通はなかなか難しく、皆とても苦労していたが、なんとかアートキャ



ンプ当日には形となり、大きな達成感となった。こうした各自の気持ちの揺れや発露、そして、自分たちでたてた計画を実現させたことへの自信などがアートキャンプの大きな意義であり、学生の成長を感じられるところでもある。

サークルであることで、アートキャンプ後も緑苑祭に向けて、カフェの改良は続き、現在、来年のアートキャンプでのカフェは、「和」をテーマにすることで始動している。この年間を通しての継続は、サークルとしての活動ということも有るが、参加のあり方の可能性を示唆するものもある。

継続は力なり。来年度も頑張ろう！

造形表現学科 教授 手嶋尚人



#### STAFF

教員 手嶋尚人

3年 森繁聖(代表) 片野里菜 山口南風

鶴岡めぐみ 御手洗里佳 関千穂子

甘楽 未帆 吉泉朝花 大田詩織

2年 南愛里 保田風花 山崎模菜

高橋千奈美 野田衣純



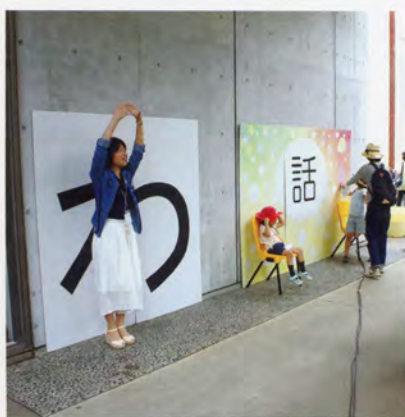
# 押し寄せる「わ」が、繋げてくれる。



## #09 結城セミ

### STAFF

教員 結城孝雄  
3年 村田里緒（代表） 蛭田知希  
斎藤美南 興座彩 芹澤優  
鈴木嘉奈子 小野寺はる



今年のアートキャンプのテーマ「わ」。私たちは、このテーマである「わ」にかけて、人と人との「輪」を広げていける何かを作りたいと考えました。そこでたどり着いた答えはフォトスポットです。現代では、自らが写真を発信するツールがたくさんあります。それらを利用して人々の「輪」を広げようと考えました。それにより、来場者はもちろん、来場者以外にも見ていただくことができると思ったからです。私たちはそのフォトスポットをあえて「未完成」のものにしました。人が加わることで完成する、そんな空間を作りました。パネルは全部で3種類です。「わ」では人が「わ」の縦棒になることで「わ」が完成します。『話』では、2人の人が椅子に座ると会話をしているような写真が撮れます。これらを

使い、たくさんの方が写真を撮ってくれました。

そしてもう1枚、真っ白な何も書かれていないパネルを用意しました。そこには来場者の方に思い思いの「わ」を書いてもらいました。2日間で余白がなくなるくらい沢山の「わ」が集まりました。みなさんの「わ」を広げるきっかけになれば嬉しく思います。ありがとうございました。

児童教育学科 三年 村田里緒

今年も盛大なアートキャンプになりましたこと、準備に携わった皆様にも厚くお礼申し上げます。結城ゼミの本格参戦は今年で2年目になりました。今年のテーマ「わ」に関して、ゼミ生たちは、いち早く反応して、私の意見も取り入れないまま決定！完全に学生主導の内容となりました。「わ」になる「わ」たし。作品の一部となる「わ」たしは、面白い試みでした。ほかのワークショップにもゼミ生たちは、交代で出かけた楽しい時間を過ごせたようです。来年に向けて折角の機会ですから、学内だけでなく、地域の小中学校に招待状を配布等の広がりが出ることを期待します。

児童教育学科 教授 結城孝雄



# 触れて遊ぶ、自然を身につける。



## #10 環境

### STAFF

教員 片田真一

4年 林千寛(代表) 杉山菜々美

野地愛莉 肥後夏音 金納千春

小山菜摘 長岐恵理子 荻野小百合

今年の環境教育学科のプログラムは、しおり作りと環境ツアーを行いました。当日は子供たちが「しおりを作りたい!」とブースに来てくれることが多かったため、特にしおり作りを中心に行いました。しおり作りでは、校内の葉っぱを自由に組み合わせてもらい、個性溢れるデザインのおりがたくさん出来上がりしました。普段はあまり気にしない身の回りの植物に改めて目を向け、世界にひとつしかない、自分だけのしおりが完成しました。

環境ツアーでは、東京家政大学内に生息するランについてお話をしました。ランは絶滅危惧種にも指定されている、とても貴重な花です。ひとりでも多くの方にランの存在を知ってもらい、良い機会になったのではないかと思っています。このようにプログラムを計画する中で、私たちも環境に対する新しい気付きや学びがありました。造形学科の方に混ざっての参加ということで、環境教育学科として何が出来るだろうと悩むことも多かったですが、本部の方や諸先生方のご協力もあり、結果形として残すことが出来ました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

環境教育学科 4年 林千寛

今年も環境教育学科生物多様性研究室の4年生がアートキャンプに参加させてもらった。彼女たちは、当初何をやっていいのかまとまらなかった。戸惑っているように見えた。

「環境教育学科の学生として」もしくは「生物多様性研究室に所属」という肩書や、「実は私たち4年生なんだけど」というちょっとした居心地の悪さも、進捗に影響を与えていたのではなからうか。でも実行委員会に参加している人々と接し話しをする中で、だんだん肩の力が抜けてきたようだった。そして自分たちの中に、他人に伝えたい事があることに気がついたのかもしれない。そんな彼女らに、ぼくは言うてやりたいことや聞きたいことがあったのだ。「伝えたいその内容は、果たして妥当なものか?その内容は相手にとっても価値のあることか?そもそもそれは伝えられる類のものなのか?伝える方法はあるか?伝えるスキルを持っているか? Is there the justice there? 伝えた後はどうするのか?そもそも何をしたいんだい」などなど。「あー、オジサンっぽい発想だ」と思われるのが怖くって、何も言えず、(今年も見守ることにしたのでした。結局うまく行ったようで、良かったです。

環境教育学科 講師 片田真一



# 思わず見上げる存在感。

## #11 住環境



### STAFF

教員 山本直

4年 切留杏珠 高橋知子 武井理紗

遠山聡子 乗口碧依 牧野佳奈

山本美佐子 小林千紗 鈴木円華

豊田絵梨 渡辺早也香 松本由佳

宮崎菜湖 飯島みゆき



「住環境デザインⅣ」の担当講師としてアートキャンプに初めて参加しました。課題のテーマは『アートキャンプの環境を考える』というもので、キャンパス内に様々な作品がある環境を、面的に捉えながら全体を繋げる作品を制作する、というものでした。開催まで2ヶ月を切るなかで、学生と対話しながらどんな作品をつくるか、頭をぐるぐるさせながら、アイデア出しをしていきました。

スタディの結果、アートキャンプの顔となるメインゲートと、120周年記念棟前の自然豊かな森を回遊することで場所の良さを再発見するような作品を作ろうということになりました。ゲートは、リボンを大量



に使い、アートキャンプのテーマカラーを意識しながら、カタチや、配色を考えたことは良かったと思います。リボンは絡み合ってしまったため、作業手順や、段取りを考えるのも重要なプロセスになったと思います。森の作品は、木々や、草の生い茂る気持ちのよい環境に木のフレームを水系で釣るものでした。とにかく、水系を引く張るのが大変だった様子。悪戦苦闘しながらも、現場で試行錯誤しながら完成にこぎ着けました。2チームとも、当初の予想をはるかに超えて、設営時の困難さを体感しながら、それでも乗り越えた学生のみなさんに拍手！

造形表現学科 講師 山本直



アートってやつぱり夢中になれる。



#12

森のサロン

STAFF

講師 伊藤 史子  
スタッフ 風間 智美 清水 幸  
峯田 千弘 山谷 智子  
吉田 由紀 中谷 里美

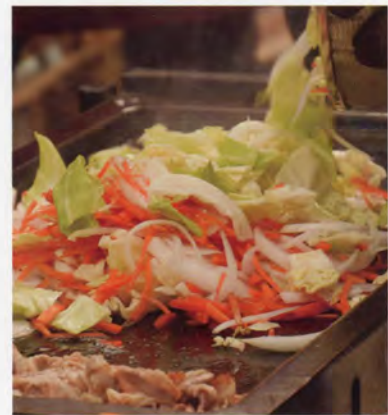
今回のアートキャンプで森のサロンは木に模造紙を貼付け、クレヨンやペンでもちたちに自由にペインティングしてもらいました。生徒や先生が木に描き出すと子どもたちも勢いよく描き出してくれました。ウサギやクマなどの動物やキャラクターを描いている子もいれば、幾何学模様、抽象的なもの（ぐしゃぐしゃの線、ただ色を塗る）を描いている子など、様々な子がいました。やはり絵を描くことは楽しいようで積極的に参加している子が多かったです。途中で色の変化を楽しんでもらうために、水の入ったスプレーとバケツを用意し、先生がどう扱うのかを見せ子どもたちにも使ってもらいました。スプレーはペンの色が滲むのが綺麗でスプレーの取り合いになるほど人気でした。新しいことを次々とやっていく子、ひたすらに描き続ける子、描くことに飽きて違うことをし出す子など反応が様々で面白かったです。

造形表現学科 三年 府川園実





# ふくらむおなかと、ふくらむこころ。



今年度の炊き出し隊は夕食のみならず夜食のご注文をいただきました。

学生はもとより教職員のおなかを満たすにはそれなりの準備が必要です。今年も大変でしたが、おいしくて、楽しかった。今年は、板橋校舎で宿泊を伴う活動になりました。まとめ役も豊田先生に代り、プログラムもいろいろ新陳代謝があったようです。炊き出し隊にとっては、これまで給食実習室の菅田先生はじめ助手さんにご協力いただいておりますが、今年もヒューリップが実働部隊で参加していただき、土屋先生に実習室や調理器具をお借りしました。土屋先生には全面協力いただき、夜遅くまで、我々のつたない調理にお付き合いです。ありがとうございます。来年はぜひ一緒に栄養学科の学生さ

んもたくさん巻き込んでワイワイやる方がいいな、と思います。

夕食は鉄板でやきそばです。お祭りの時の屋台を連想しますが、30人前を同じ時刻にドーンと配給しなければならぬことは大きな違いです。しかも3〜4クール繰り返し返されます。効率よく調理するために、午後3時過ぎからひたすら下ごしらえしていただきましたヒューリップの皆様には感謝です。

夜食の準備も並行して行い何とか間に合うことができました。茹で鶏、タコのカルパッチョ、カプレーゼ、じゃがコン炒め、なかなか好評でした。しかし、プログラムが押していたため、ゆっくりみんなで会食というわけにはいかず、残念でした。夕食、入浴、炭の処理、後片付けなど夜の映像プログラムとの時間配分を考えないと夜の施設時刻が決まってたためあわただしくなっていました。

この夜食の時間が適当かどうかかわからないが、各プログラムの活動報告や各自の学び、感想、発見、成功失敗、苦勞、悔い、悩みなどなど発表し、参加者にシェアしてそれらを共有する時間は欲しいところです。

来年は何が食べたいですか？

児童教育学科 教授 木村博人

## #13

## 炊き出し

### STAFF

教員 木村博人

ヒューリップスタッフ

大畑 瞳 田淵 千晶

今里 恵利佳 坂本 亜紗美



歓声は途絶えることなく。



#14  
ステージ

CAST

児童演劇研究会 JAZZ 研究会  
フラダンスサークル 軽音楽部



私たち児童演劇研究会は、今回は「和」をテーマに扇子を使った動きや、しなやかな動作を取り入れたパフォーマンスに挑戦しました。普段の元氣いっぱい私たちとはまた違った、格好良くキレのあるパフォーマンスを目標に日々練習を重ねてきました。エンタメの未来の新たな可能性を切り開くことの出来た公演となりました。また、私たちは一人一人様々なエンターテイメントに挑戦し、「家政の太陽」を目指して、多くの人に笑顔を届けるべく活動しています。今回の公演も一人一人が輝く瞬間のある素敵な公演作りができたと感じております。また皆様に進化した私たちのパフォーマンスをお届けするために日々精進して参ります。

三年 児童演劇研究会 津村英

今年のステージで私達、フラダンスサークルは染色部さんとのコラボレーションを計画しました。染色部さんが生地を染め、裁断し、手縫いで髪飾りを作り私達が身に付けてステージに出るというものです。

普段私達が使用する髪飾りはハイビスカスやブルメリアといったビットで目に付く、如何にも「フラダンス」なものなのですが、染色部さんが作ってくれたのはバステルカ

ラーを基調にした見た目柔らかかな印象を受けるもので、大きめの花びらがステージ中に吹くそよ風に靡く様がサークル内でも評判でした。

三年 フラダンスサークル 小島光夏





伝えたいこと、残したいこと。



# #15

## 記録・広報

記録×みんなのWA

### STAFF

教員 有馬十三郎 助手 本橋真里  
3年 松嶋美晴(代表) 近藤紋(代表)  
松橋菜々 小林ひかる 大熊菜月  
加藤智香 新井萌菜 山口南風  
野本結菜 高林那奈 鳥畑侑理香  
2年 高橋萌花 萩原愛結 佐藤かおり  
1年 勝茜音 木村彩音 古谷美保  
小林一花

広報の仕事はロゴやポスター、リーフレットといったデザインすることが主でした。最初の仕事はロゴとポスター制作でしたが、当時広報のメンバーが二人しかおらず、相談しながら作業をしたのを覚えています。それからメンバーを募集すると三人も加入してくれ、リーフレットの制作では作業を手分けして進めることができました。ロゴ、ポスター、リーフレットのデザインは、今年のアートキャンプのテーマである『わ』を軸に、『わ』から連想される漢字の『輪』『和』『話』・・・と『わ』のイメージを受けてデザインを進めました。ホームページ上の各プログラムのアイコンは二年生の二人がデザインしてくれ、シンプルで見やすく、かつ可愛いものを作ってくれました。アートキャンプ当日は受付の仕事をし、各プログラムをゆっくり回る事ができました。当日回ってみて、体験するお客さんに楽しんでもらおうという気持ちが伝わり、とても楽しかったです。プログラムの方も楽しんでいるように見え、アートキャンプに来た人たちは誰一人つまらなそうな顔をしていなかったように思えました。

造形表現学科 三年 松嶋美晴

私たち記録の見どころはナナイチギャラリーでの展示です。3つの展示を行いました。中でも準備期間から本番当日まで撮影した写真を使ったスライドショーの展示がメインとなりました。開催当日までは準備期間中の活動のスライドショーを、本番1日目からは撮影したものを定期的に集めすぐにスライドショーにしてタイムリーに映していきました。装飾はテーマの様々な意味、形の『わ』を円状にしその中に映像を映し、記録なりの『わ』を表現しました。みんなが少しずつ作り上げてきた『わ』がナナイチギャラリーからも広がったのではないのでしょうか。こうした学校での大人数が関わるプロジェクトに参加し、能動的に活動する機会がなかなかないのでとてもいい経験だったと思います。みんなでなにか1つのことに向かって協力する大変さや、楽しさを味わうことができたと思います。

造形表現学科 三年 近藤紋



#16  
写真コンテスト

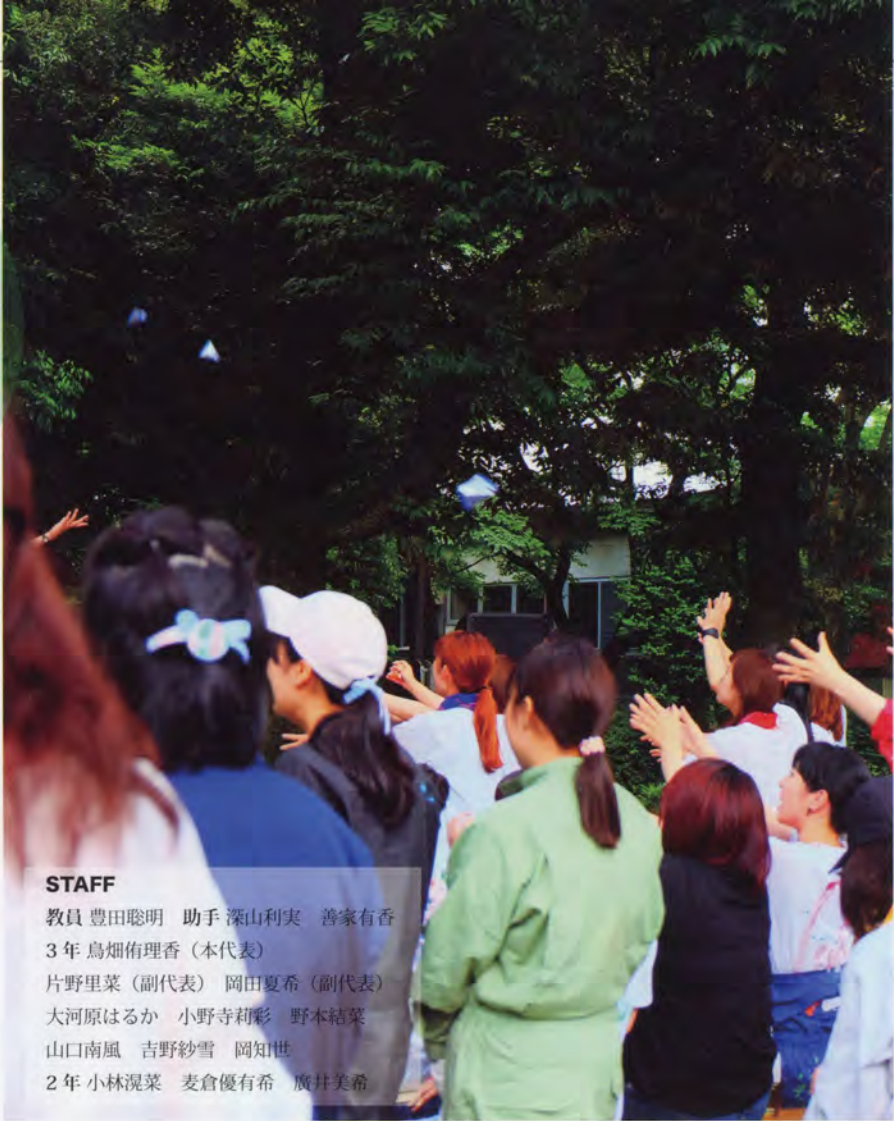








おつかれさま。ありがとう。



#### STAFF

教員 豊田聡明 助手 深山利実 善家有香  
3年 鳥畑侑理香 (本代表)  
片野里菜 (副代表) 岡田夏希 (副代表)  
大河原はるか 小野寺莉彩 野本結菜  
山口南風 吉野紗雪 岡知世  
2年 小林滉菜 麦倉優有希 廣井美希

# #17 本部

今年度のテーマは「わ」でした。

なぜ「わ」にしたのか。それはこのアートキャンプを通して、学科学年などの垣根を超えてつながっていただけ。素晴らしいな、そんな本部メンバーの想いからです。輪、和、環、話、いろいろ「わ」を広げてもらおうとひらがな表記にしました。

本部では、いろいろな仕事を承りました。まずはじめにアートキャンプ自体の開催実現に向けて、場所の確保、スケジュール調整、必要備品の確認、先生を含めた話し合いなど、昨年度末から動き始めました。今年度は板橋キャンパスでは初めての宿泊有りのアートキャンプだったので寝具の手配などもしました。そして、たくさんの有志が集まった様々なプログラムさんやステージ公演していただくサークルさんなど全体会議で進捗状況をそれぞれ確認し取りまとめました。

当日は開閉式の運営、受付係、救護班など仕事をこなしました。また、各プログラムさんに一角をお借りして、消しゴムで作成したスタンプラリーも実施しました。

不安なこともたくさんありましたが、たくさんの方々に支えられ、なんとか形となり、参加していただいた皆さんの笑顔が見られたのが何よりうれしかったです。

造形表現学科 三年 鳥畑侑理香

今年で六回目になるアートキャンプ、当初は本部を担当してくれる3年生の立候補はありませんでした。なかば強引な僕の誘いに応えてくれたのが今年のメンバー。それぞれの

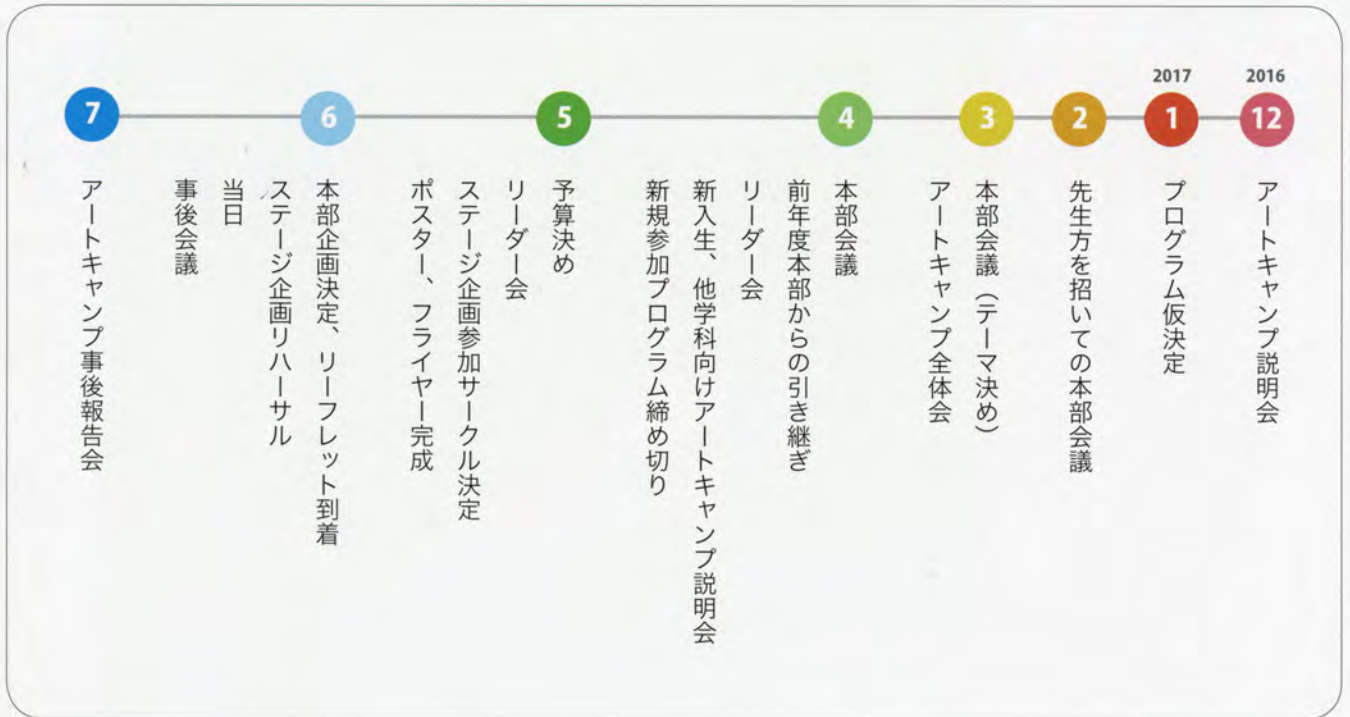
メンバーは、それぞれの持ち味を活かし本部を運営してくれました。時には、どうしても責任が重くなる仲間を皆なで支え合う努力、前向きに取り組む姿勢を最後まで諦めなかったメンバーに敬意を評したい。

「わ」というテーマ。本部運営（アートキャンプの要となる部門）を担う事の意味を十分予測できていたからこそ生まれた言葉でもあったかと思う。「わ」輪は、一本の線でなく始まりと終わりが繋がって輪になる。出発点と到達点と成功と失敗と矛盾をはらみながらも途切れない。「わ」和は、心と心の繋がりでもある。本部メンバーのそれぞれの心の中にある「わ」が組織を有効に機能させる生命線でもあった。僕は今でもこのメンバーと過ごせた時間に温かみと親しみを感じている。

学んだこと。苦労と楽しさの中にいろいろなることを経験できたアートキャンプ。学べたのは社会人基礎力だけではない。逆境の中でも失われない遊び心・優しさ・工夫する心は「遅しさ」や「しなやかさ」として、皆の未来を助けてくれる財産となっただけだ。そう理解し自信と伴にまた新たな挑戦へ赴いてほしい。

造形表現学科 准教授 豊田聡明





## スタッフ 総勢…176名

### 造形表現学科

4年 15人  
3年 68人  
2年 24人  
1年 5人

### 環境教育学科

4年 9人  
2年 2人  
1年 1人

### 児童教育学科

3年 7人  
2年 2人

### 児童学科 児童学専攻

4年 1人  
2年 2人  
1年 1人

### 児童学科 育児支援専攻

2年 1人  
1年 2人

### 英語コミュニケーション学科

3年 1人  
2年 2人  
1年 2人

### 服飾美術学科

3年 3人  
2年 4人  
1年 2人

### 栄養学科

3年 5人  
2年 5人  
1年 7人

### 心理カウンセリング学科

3年 2人  
2年 2人  
1年 1人

## 本部企画

東京家政大学 H29年度板橋アートキャンプ

# スタンプラリー

スタンプが  
全て揃うと  
自分でオリジナル  
缶バッジが作れる！

22号棟で、  
完成したスタンプカードを見せると  
缶バッジが作れます！

スタンプラリーシート、スタンプ案  
作：造形表現学科 2年 麦倉優有希



おわりに

アートキャンプ2017お疲れさまでした。今回のアートキャンプはテーマは「わ」でした。この「わ」というテーマを冊子のヒントとし、冊子全体のレイアウトデザインを統一しました。加えて、目を引くための写真、見出し。編集にあたるメンバー全員が、全てのページを見つめ、よりよくなるように話し合いを重ねました。

例年よりも時間をかけた制作となりました。時間をかけた分、よりよいものを作れたと感じています。誰もがはじめての経験でしたが、冊子という形となつて、皆様のおてもとに届いていることを嬉しく思います。あとがきから読まれている方も、本編を読まれて来た方も、今一度全体を眺めて頂ければ幸いです。

そして、この冊子を制作するにあたり、ご協力いただいた各プログラムスタッフへの感謝を忘れてはなりません。編集長という立場を授かり、右も左もわからないところに手を差し伸べてくださった先生方、ともに思考を巡らせた冊子編集スタッフ方には大変お世話になりました。

この冊子は、アートキャンプのただの報告書です。アートキャンプを盛り上げる一つの要因として、みなさまの思い出を呼び起こす要因として、時折見返していただけないでしょうか。学科を越え、学生が中心となり発揮した創造力とこの経験を、今後の生きる道に役立ててほしいと願います。

造形表現学科 三年 新井萌菜

## STAFF

教員 有馬十三郎 / 助手 本橋真里

3年 新井萌菜(編集長) 加藤智香 大熊菜月 鳥畑侑理香 山口南風 高林那奈 野本結菜 近藤紋 小林ひかる 松嶋美晴 松橋菜々

## 板橋アートキャンプ2017 報告書

編集 アートキャンプ2017 報告書制作スタッフ

発行日 2018年1月23日

発行所 東京家政大学 家政学部 造形表現学科

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

印刷・製本 株式会社美創企画



